

R・ボーレン以後の説教学の動向——聞き手の問題を  
中心として(要旨)——  
(第1回教職(牧師・聖書科教師)研修セミナー)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 佐藤, 司郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24691">https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24691</a>

## R・ボーレン以後の説教学の動向 ——聞き手の問題を中心として（要旨）

佐藤 司郎

今回の第一回教職セミナーでは「R・ボーレン以後の説教学の動向——聞き手の問題を中心として」と題し、以下のような内容の発題講演をした。

はじめに

1, ボーレンの聞き手論とその背景

2, ボーレン以後

メラー、魂への配慮の中での説教

タイセン、テキストと聞き手

エンゲマン、コミュニケーションの出来事としての説教

まとめ

演題に明らかなように、ここで私が試みたのは「聞き手の問題」を中心にして「R・ボーレン以後の説教学」の動向をさぐることであった。「聞き手の問題」はボーレンのところで聖霊論的に解決されたかに思われたが、それ以後の様子を見ると、むしろボーレンは問題の扉を新しく開いたようにすら見える。つまりボーレン以後、少なくともドイツ語圏の説教学は聞き手の問題を中心に動いているように見えるのである。むしろこの問題はいつの時代も説教者にとってもっとも重要な課題であったことはいうまでもないし、それは今日のわれわれにとっても同じなのだが……。聴衆に届く言葉をいかに獲得するか、そ

のことでみな苦勞しているわけである。そこでそのための何らかの手がかりをえたいというのが本講演の目標であった。

1 ボーレンはむしろこの問題への新たな扉を開いたのではないかといったが、じっさい彼は彼以前のこの問題の所在とその理解を批判的に受けとめて一つの筋道をつけた人といつてよいように思う。今日しばしばケリュグマ的神学とも呼ばれるバルトやトゥルナイゼンの神の言葉の神学に立っていたボーレンは、説教における聞き手の問題をめぐり、1960年代の、聞き手の状況を重く見るエルンスト・ランゲの問題提起を受けとめながらも、神の言葉の神学の立場を聖霊論的に伸張することで解決をはかろうとした。「徹底的に神の可能性の中に包み込まれてしまっている説教の行為は、靈において、靈を通じて、徹底的に説教者の事柄、また聞き手の事柄となる。靈において、靈を通じて、技巧、技術をつくす人間的可能性となるのである。聖霊論的出発は——神学の優位を否定することなく——人間学的局面にもその位置を正しく与える」(傍点、筆者)。この説教学に対する聖霊論の意義を説いた文章に聞き手をめぐるボーレンの基本の考え方も示されている。しかしその上で彼は、聞き手を顧慮するとはどういうことかについて、きわめて独特な考え方を展開した。説教の第一の聞き手はじつは神であつて、この神は人間なしであらうとしない神であるかぎり、神を顧慮することの中には人間の聞き手(聴衆)への顧慮が含まれ、求められると。かくて聞き手は第二のテキストとして説教者による釈義を要求するものとなる。聞き手の「創造的発見」が求められるのである。聞き手をどのように考慮していくのか、ボーレンは「聴衆への道」として詳細に述べているが、ここでは触れない。いずれにせよ聞き手を靈の現臨の中で創造的に発見する課題は、今日のわれわれにとつてもますます大き

な意味をもってきていることは確かである。

2 ポーレン以後として、私はメラー、タイセン、エンゲマンを取り上げた。ハイデルベルクのポーレンの後継者メラーを扱うのは当然であろう。タイセンは著名な新約学者であり、エンゲマンは中堅の説教学者として活躍している人である。共通しているのはそれぞれが聞き手を顧慮する方向へと向かって説教学を考えていることである。

メラーは日本でも加藤常昭先生の紹介によってわれわれにすでに親しい。『慰めの共同体・教会』という本は近年読んだ実践神学の本の中でもっとも啓発的なものの一つであったし、二度の来日によってご存じの方も多であろう。彼のいう「魂への配慮の中での説教（牧会的説教）」と「対話的説教」は、まさにポーレン以後の聞き手を顧慮する説教学の一つの方向を示しているといつてよいように思う。「魂への配慮の中での説教」は、メラー自身いうようにポーレンにもランゲにもない項目であり、独自の概念である。「対話的な説教」というのは、メラーによれば、その秘密は「聞きながら語る」ということだが、これも聞き手との関わりを重視したものといつてよいであろう。

次に著名な新約学者タイセンの説教論を取り上げた。彼は説教学の本（『信仰の徴標言語——今日における説教のチャンス』(Zeichensprache des Glaubens—Chancen der Predigt heute, 1994)を書いているほか、説教論に関するいくつかの論稿がある。その中の比較的短い論文「釈義と説教学——新しい説教のための刺激としての新しいテキストモデル」(2001)を今回は取り上げた。彼はここで釈義と説教学の関係の再構築を願って、今日の釈義に広く見られるテキストに関する見解を紹介し、説教(学)に新しい刺激を与えようとしている。彼が

示したテキスト論は以下の四つ。

- (1) テキストとは包括的な徴標世界ないし徴標言語の実現体である。
- (2) テキストは聞き手の活動によってはじめて意味を与えられるところの『開かれたテキスト』である。
- (3) テキストとは『前テキスト』を多様な形式において取り上げている『相互テキスト的なテキスト』(inter-textuelle Texte)である。
- (4) テキストは聖書における彼が示したテキスト論は、テキストの正典的形態であるところの『最終形態』において解釈されなければならない

上の(2)のテキスト理解が聞き手と関連している。彼の説明によれば、「聞き手と読み手は、そこで特別な仕方でもアクティヴ(行為的)にならなければならない。習慣に完全に固定化されていないことを、彼らは聞くことと読むことの意味付与の行為によって作り出さなければならない。要するに、テキストの共同-著者として意味を取り出すことにアクティヴに関わっている」。こうしたテキスト理解によっていくつかの説教理解がもたらされる。第一に、説教者は釈義の「書き取り」への恐れを忘れるべきである。いろいろの可能性があるのであって、読む人も、聞く人も自らアクティヴにならなければならない、とり分け説教者自身がそうでなければならない。第二に説教は、それがそうした聞き手の行為的関わりを刺激しそれを制限しないときにじつは良い説教なのである。説教者がいおうとした通りに聞いていないという不平は、不純な不平である。なぜならそれは説教者が理解を操作できないことに対する不平なのだから。それとも自分のものにする自由があることを、意識して受け入れるべきでないともいうのだろうか。第三に、自

分のものにする自由は、とくにテキストが、譬のような場合はっきりするであろう、等々である。釈義と説教学との新しい相互関係というとき、タイセンは釈義の優位性というようなことをいっているのではない。むしろ説教がそうしたことにとらわれてきたことを批判しているのである。新しい関係においては釈義の優位性ではなくテキストの優位性が存在する。テキストをめぐって読み手と聞き手の新しい関係がつけられる。彼によれば、釈義の課題はテキストの内的豊かさを開示することであり、それを閉ざすのではない。その意味で釈義は、説教学とのその関連の中で、テキストを、新しいテキスト創出的な創造性の出発点として開示するという課題をもつ。釈義はテキストへの愛を促進させるとき、あらゆる説教学の最大の課題である説教するための動機づけを与えることになるのだという。こうしたタイセンの試みもテキスト論という形をとりつつ、新たな説教理解を要求し、結果として、聞き手を新たに位置づけ直していることは明らかである。テキストから始まる一方的な書き取りの関係、その中での説教者から教会へという関係ももはや不可逆ではないといわなければならない。

最後に、ヴィルフリート・エンゲマンを取り上げた。彼は1959年生まれ、現在ミュンスター大学の実践神学、説教学の教授。90年代はじめから数多くの論文を発表している。今回は『説教学入門』(Einführung in die Homiletik, 2002)の中で論じている聞き手理解を取り上げてみた。説教の本質を「コミュニケーションの出来事」として、「説教の出来事」を「理解と了解のプロセス」としてとらえるエンゲマンにとっても聞き手の問題はきわめて重要である。聞き手の問題はこの本のⅢ部で取り上げられる。「一人の人間のために説教すること——説教の状況関連への問い」。この表題からも明らかなように彼

は説教の状況関連性を強調した。それゆえランゲを評価し、むしろポーレンのランゲ批判が批判される。ランゲについて、「説教の出来事における聞き手の重要性の再発見」というような評価にとどまっているが、そうではない。彼は次のようなヘンキュスの評価に同意する。「いつも新たな歩みによって彼が試みたのは『経験された現実』と『信じられた約束』とを一緒に考えることによって、『この世に対して自らを孤立化させる教会』と『社会科学に対して自らを閉ざす神学』とがたとえリスクであっても開かれていくように挑戦を受けることであった」と。つまりランゲはたんに聞き手を applicatio〔適用〕の行き先として十分考慮するというのではなく、聞き手が自らの生の了解へといたるべき説教を要求したのである。その意味で、たとえばポーレンがそう理解し語っているように、ランゲにおいて聞き手が説教の主題になっている、そんな説教は聞き手として聞きたくないというような誤解をしてはならないのである。これ以上はここでは述べないが、エンゲマンは新しい状況関連的説教を志向しているといつてよいであろう。その意味でメラーの「魂への配慮の中での説教」も評価している。エンゲマンによれば、「聞き手の状況を説教のカテゴリー」として理解したランゲは最初の人ではなかったし、また最後の人でもない。ゲッティンゲンのヤン・ヘルメリンクはこうした流れを「説教学的状況への実用主義的かつ経験主義的転換のヴァリエーション」としてとらえ、ハンス・ディーター・バステアン（説教学的状況の問題性）、ゲルト・オット（説教学的状況の歴史性）、ヴェルナー・イエッター（説教学的状況の言語性）などをランゲの問題提起を改変しつつ継承している人びととして挙げている。

以上、われわれが確認してきたことは、聞き手ないし聞き手

の状況を何らかの仕方で顧慮する方向へボーレン以後の説教論が向かっているということである。それをどのように受けとめていくか、それはわれわれそれぞれの課題である。

こうしたことを考えながら改めてカール・バルトの説教を思い起こしてもよいのではないだろうか。ここでも詳しいことは省略せざるをえないが、バルトの説教もまた聞き手を考慮した説教だった。とくに、晩年、1954年から64年までの十年間パーゼル刑務所でなされた説教は、たしかにそれはしばしばいわれるように二十世紀を代表する優れた説教であるが、何よりもそれらはメラーもその意味で評価しているようにまさに対話的説教であった。ブッシュのバルト伝を読むと、バルトがくり返し独房を尋ね、彼らの語ることにひたすら耳を傾けていたことが知られる。バルトは聞き手である囚人の状況を聖書の中に読み取り、逆にまた聖書の現実を囚人の生活の中に見いだす。そして御言葉が彼らの一週間の生活を支えるようにと、一、二節の短い聖句を明快に説き明かした。それはまさに対話的説教であり、魂への配慮の中でなされる説教にほかならなかった。しかしじつはこうした聞き手とその状況を顧慮した説教はザーフェンヴィル教会牧師いらいのものといってもよいのかも知れない。なるほど彼はケリュグマの神学とその説教論の元祖のようにいわれるし、それはそれで間違いではないのだが、まさにもそうであるがゆえに、といったらよいか、ともあれ本来の彼の説教のスタイルは聞き手とその置かれた状況を聖書の福音の現実の中で鋭く読み取っていくものであった。そういう観点からバルトの説教、あるいは説教理解を再検討することも必要であるように思っている。

※ なお本講演全体は、説教塾紀要『説教』第9号、2007年11月、教文館発行、に掲載されています。